

どこぞの
力フエの①
店先で

山形浩生

電車初乗り 一〇〇〇円の 現実性

またマラウイに戻ってきた。いま、ここは干ばつの影響で地方部に飢餓が広がってきているのはご承知のとおり。だけれど、ぼくのいる首都にはあまり大きな影響は出でていない。主食のシマが一部で手に入りにくくなっているくらいかな。

日本はいま、日経平均がまたどこか下がって九〇〇〇円割れ寸前（と書いているうちに割れた）、台風が東京を襲おうとしている、そんな時期らしい。が、日本を離れて数日もたつうちに、日本というものははるか彼方の、意識の片隅に追いやられてしまう。そういうえばそんな国もあつたなあ、という感じだ。そんな彼方にきて何をしているかというと、こちらの無電化村に電気をひくにはどうしたらいいのかを考えてい

るのだ。
そういうと見当がつくかもしれない。しばらくまえに、鈴木宗男で有名になつた海外援助の一環だ。ぼくはその調査団の一人としてやつてきている。その意味で、本誌を読んでいる多くの人のような、気ままな旅行者とはちょっと性格がちがうのかもしれない。

好き勝手にどこかに行けるわけじゃない。かなりの時間は、現地の役人との協議やうちあわせだから、ずっと首都にいることになる。数年前はバングラデシュにいた。その次はモンゴルだった。ミャンマーにもよつとい、そしていま調査しているのがマラウイなのだ。

マラウイの首都リロングエ、特に政府機能のある新都市は、決しておもしろいところではない。うつかりつくば市みたいな人工的新都市を作つてしまつて、でも多くの新都市と同じく

向人にや活動が集まらずに、道だけはなんかよいけれど、建物がまばらで、店もなく、日が暮れた瞬間に外を出歩く人が一切いなくなる。また、出歩いたつて何があるわけじゃない。夜に開いている食事屋も、本当に数えるほどしかない。マラウイにくる人は、リロングエに泊まるなら絶対に旧市街のほうに宿を取るようになら。あつちなら、まともな飯屋もある。昼はにぎやかだし、夜になつても人は出歩いているし、充

春婦も立つていて（でもH.I.V.感染率が數十パーセントのこの地でそういうリスクを冒すのは、逆ロシアンルーレットとまで言われる危険行為だ）、酒場もあるし、ディスコもある。こつちは何もない。タクシーを拾つて（ほかに交通手段はない）旧市街に行つてもいいけれど、これが結構高い。往復で一〇米ドルくらいはかかる。こっちの金銭感覚からすると、法外だ。だからいいがいの晩は、ホテルに閉じこもつていることになる。

頬で得意げに話したりしているのが無性にかんに隠る。ちなみにそういうやつが、翌日ワークショットなんかで話すと「途上国になると、やはり先進国にはない人との出会いがすばらしい」とか神妙な顔で言っているのだ。

たまにそういう立場から連れられるのが、フィールド調査だ。ぼくは財務屋なので、あまりフィールドに出る機会がない。たいがいは、役所や公共事業会社に詰めて帳簿をにらんでいるのだけれど、でもなるべく口実をつけて、外に出るようにしている。それにこれは、仕事上も役に立つ。ふつうの人が飯に払う水準とか、いろんな日用品の値段とか、そういうものがわからないと経済感覚がなかなかつかめない。首都の町中と、地方の村とでは値段の水準もがう。そんなものは地元の調査屋とか、カウンターパ

ート（担当省庁）のお役所の人にくけばいい、という人もいるけれど、それじゃ実感がない。それで、先日は珍しく、そういうフィールド調査に出でたのだった。首都から車で三時間ほどのところにある、無電化村だ。村の名前は、書いてもしょがない。別に何があるわけじやないもの。どこにでもある村だ。そしてそこで入ったのが、写真のティーショップだ。外から見ても、ただの家にしか見えなくて、でもちよつとのぞいたら値段表が出ていたので入ってみたのだった。パンと、卵と紅茶か牛乳か。メニューはそれだけ。むしろ本業はパン屋で、紅茶はまあついでみたいなものだろう。ほら、写真の奥のほうの棚に、パンが写っている。店の裏のれんがのオープンで焼いたものだ。紅茶は、こいうところの常として、砂糖と牛乳（粉ミルク）がしこたま入っている。途上国では、紅茶やコーヒーもカロリー源の一つだ。ぼくの喰つているパンと紅茶で、五〇ケワチャ（約八〇円）くらいだったろうか。パンは焼き立てで結構うまかったのが驚きだ。パンは、そこにあるくらいが一日ではけるよ、と写真に写っている店主が言っていた。うーむ。するとそこそこの経済

活動はあるようだ……

店内は狭くて、ぼくのすぐ背中はもう入り口だ。その入り口には、変なアジア人が紅茶を飲んでいるのが珍しくて、ガキと大人が群がつている。そして「大丈夫ですか、腹壊しませんか」と心配してくれる団員たち。壊しませんよう、パンは焼きたてだし紅茶は熱湯だし。本当はもうちょっとゆっくりしたいだけれど、結構フィールド調査もあわただしいのだ。店を数えたり施設を見物したり。で、そんなことをしてどうするんだろうか？ それによつてぼくは何を実現しようとしていて、それがどこまで現実的なのか？ 援助して本当にこんなところが発展するのか？ そんなことをこれから少しずつ書いていきたいと思うのだ。

◆プロフィール

やまとひろお

一九六四年東京生まれ。東京大学工学系研究科修了。某大手シンクタンクで地域開発やODA関連調査のかたわら、翻訳、執筆活動を行なう。主な著書に「新教義主義宣言」、訳書にエリック・レイモンド「創世とバザール」他多数。



『新教義主義宣言』(晶文社)